



スニーカーを履くファッションショーの来場者(イタリア・ミラノ市内で)

ハイヒールを脱ぎ捨てて

【ミラノ＝野倉早奈恵】ハイヒールは時代遅れ? 高級ブランドが新作を発表するミラノコレクションで、スニーカーが存在感を増している。ヒールの靴を履かない女性来場者が増え、高級スニーカーをブランドが相次いで提案した。ヒール靴の強要は女性差別との声もあり、脱ハイヒールの動きが広まっている。

「強要は差別」
「体に負担」

ミラコレ、スニーカー存在感

グッチが20日に開いたショーの会場では、スニーカーを履く女性が目立った。オーストラリアのファッション雑誌の編集者、アリソン・ベネスさんは「今の気分はハイヒールではなくスニーカー」と話す。

イタリアの皮革ブランド「フルラ」は初めて女性向けのスニーカーコレクションを発表し、ミラノ市内に期間限定の店舗を設けた。同社の最高経営責任者(CEO)アルベルト・カメルレンゴ氏は「トレンドを代表するアイテムはスニーカー」と言い切る。靴ブランド「セ



セルジオ・ロッシの2019～20年秋冬の新作。エレガントなスニーカーも並ぶ

ルジオ・ロッシ」の新作展示会では、厚底スニーカーが並んだ。脱ハイヒールの動きを加速させたのは、セレブリティー(著名人)たちだ。2015年のカンヌ映画祭で、底が平らかな靴を履いた女性がドレスコードにそぐわないと履き替えを命じられたことに抗議。ハイヒールの強制はできない、と女性たちがレッドカーペット上でハイヒールを脱ぎ、平

らな靴で来場する姿がニュースになった。服飾史家の中野香織さんは「第2次世界大戦中のピンナップガールや戦後の男性誌の影響でハイヒールが女性性の象徴としてみられるようになった」と話す。「ここ数年、女性が抑圧に対して我慢をせずに声を上げるようになった。ハイヒールもその一つ。脱ハイヒールの動きは肉体的な苦痛から解放されたいという女性の思いと、流行がかみ合った結果だろう」と分析する。ハイヒールの「苦痛」から

解放しようという運動は日本でも始まっている。女優、ライターの石川優美さん(32)は1月、ツイッターで「女性が仕事でヒールやパンプスを履かなきゃいけない風習をなくしたい」と書き込み話題になった。

専門学校に在学中、研修の一環でホテルでアルバイトをしたときに、パンプスによる靴擦れや指の変形などで苦しんだ。現在のアルバイト先でもパンプス着用を推奨されていることに「体に負担をかけてまで必要なマナーなんだろうか」と疑問を持ったという。

書き込みの賛同者が、アメリカ発のセクハラ告発運動「Me Too(私も)運動」に倣い、靴と苦痛を掛け合わせた「#KuToo」というハッシュタグを考案。今月10日からは石川さんが発起人となりインターネットで署名活動も始めた。「女性に選択肢がほしい。当たり前と思われてきたマナーが性別別にならざることもある」と訴える。